

## 『人の砂漠』

沢木耕太郎著／新潮社

本書は沢木耕太郎がまだ二十代の頃に著したルポルタージュであり、八編が収められている。それぞれの取材対象は以下の通り。

- ・栄養失調で亡くなった“ひとり暮らし”のおばあさん（「おばあさんが死んだ」）
- ・障がいを抱え他に行く場所のない元娼婦たちのコミュニケーションでの生活（「捨てられた女たちのユートピア」）
- ・本土とは違う論理と時間が流れる南の辺境、与那国島に暮らす人々（「国境の視えない共和国」）
- ・北海道の北端のロシアとの境界で拿捕覚悟の漁を続ける人々（「ロシアを望む岬」）
- ・鉄屑の仕切り屋とそれをめぐる人々と屑の構造（「屑の世界」）
- ・先物相場師たちの栄光と挫折（「鼠たちの祭り」）
- ・“不敬行為”で人生が大きく変わってしまった人々（「不敬列伝」）
- ・街ぐるみ相手に孤独な詐欺をはたらいた女性（「鏡の調書」）

いずれも、社会の辺境でもがき、あるいはいきいきと生活する人々に焦点を当て、その世界に自らを投じなければ得られないような体験を記して、大変読み応えがある。しかし、著者と対象者の間には一定の距離感があり、決して熱くならず対象者と並走して行く、独特のスタイルがある。

最初の「おばあさんが死んだ」で始まるルポルタージュは、一九七六年の冬、七十二歳で栄養失調で亡くなった女性の人生を追ったものだ。

女性のうめき声を近所の人が聞き、病院に運ばれるもまもなく亡くなった。最後の言葉は「おかあちゃん」であったと言う。残された著しく汚い部屋には、不可解な英語交じりの十冊のノートと、ミイラ化した兄の死体があった。女性は、亡くなった兄と一年半余り暮らしていた。

ノートに書かれている言葉は、なにかの恐ろしい呪文のようで、和製ホラー映画に挿入される一節のようである。

「四八・六・六（水）STOP STOP EXHAUST 永久断絶 総全面拒否 STRAIGHT  
ニ自我道ヲ行ク」

「四九・六・二九（土）ETERNITY」

---

「四九・七・四（木）細胞ノ死滅 POISON化ハ永年蓄積遂ニ癌化シ 諸症状ヲ起シ生命ヲ終ル」

なぜ餓死に至るまで食事を取らなかったか。なぜ病院に行くことを拒絶し、病院では医師に対して激しい悪態をつき続けたのか。他に身寄りはなかったのか。日記の言葉の意味は何か。

著者は、謎を解いて行くというより、ただおばあさんを理解したい衝動にかられ、引っ張れば途切れてしまいそうな細い糸をたどって、暗く深い闇に分け入る。

彼女は歯科医であって、それなりに学問があった。その技術を持って各地を転々とするが、生活は裕福なものではなく、隣人の尊敬を集めるものでもなかった。最後に職を離れてからは、人付き合いもせず、生活保護も拒否し、出納帳でもある例のノートに克明に出費のみを記して暮らしていた。

彼女についての情報の断片を集めても像を結ばない。その事がかえってこの女性の人生を象徴しているかのようである。兄の方は何を思って暮らしていただろう。兄が亡くなって、妹がそれを隠していた理由は？ 遺体の傍らで寝起きしていた形跡がある。ノートの最後の記述は、

「四九・一〇・二（水） 祭花キフ 五〇〇円」

であった。「美しかった」兄とは、誕生日が七ヶ月しか変わらないことが後でわかる。

そもそも、当時まだ二十代の著者は、正気とは思えないこの人物の何にこれ程惹きつけられたのか。どうしてこの人の「死に躓いた」のだろう。この「ブックガイド」を手にする学生さんたちも二十歳前後だけど、こんなおばあさんに興味持てるかな？ 昨今では、グローバル化した労働市場で勝ち抜くことができる人物が強く求められているが、この物語の中心は、それとは程遠い、身の回りあるいは自分のみにしか興味を寄せない、貧困の只中にいた人物であり、およそ私達との接点が無いようにも思える。

しかし、「彼女は私であったかもしれない」あるいは「いつか彼女は私になるかもしれない」と想像する。彼女の偏屈さは私の偏屈さ。彼女の孤独は私の孤独。この事件は、ただの猟奇的な事件ではなく、普遍性のある、人の生に繋がっている気がする。書名『人の砂漠』というのは、大体そういう意味かとも思う。

---

## 執筆者紹介

原 信一郎

基盤共通教育部教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

---

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格  
『人の砂漠』 沢木耕太郎著 新潮社（新潮文庫）1980年 810円

[ブックガイド目次へ](#)